要解

古文解釈

三谷栄一
稲村　徳　著

有精堂

要解

古文解釈

三谷栄一
稲村　徳　著

有精堂

要解　古文解釈

定価 750円

昭和56年5月20日　初版発行

著　者　三谷栄一
　　稲村徳

発行者　山崎誠

101　東京都千代田区神田神保町1－39
発行所　有精堂出版株式会社
電　話　03（291）－1521～3
振替口座　東京9－40684

〈検印省略〉　－310560－8610

はしがき

「**古典**の良い参考書はありませんか？」――と言ってくるのは、高校一年の諸君なら七月、高校三年生だと八月の後半から。大事の時期の二年生の諸君は、これは、すこぶるのんき、不安も、なんのその！　これらが、多くの諸君の姿である。

そこで、著者たちは、高校一年生から三年生まで、――古典は多少は知っているという諸君を対象として、次のような目標を立てて、討議を重ねて、きわめて読解しやすい本書を書いた。

Ⓐ・①平易にして、②最も基本的なもの、

Ⓑ・③標準的なものであって、④応用力のつくもの、

Ⓒ・⑤古典を多面的に着実に読みながら、⑥統一的・体系的に身に付けられるもの、

Ⓓ・⑦視野が広くなって、⑧人生を豊かにするようなもの、

Ⓔ・⑨楽しみながら、⑩最後にそれぞれの目的に花を飾るようなもの。

さらに**読み方の方法**があり、出題度数の高いものが程よい題数で選ばれ、いずれも左右の見開き二ページで完結し、**文学史の展望**を試み、諸君の最も苦手とする**古典文法**は、助動詞・助詞・敬語法・係り結びの四つとし、さらに**最重要古語三三〇**を用意してある。

本書を丹念に数回ほど読破して記憶と知識との確認を図れば、諸君の希望は容易に達成するはずである。諸君に本書の愛読・精読を、切に希望するものである。

昭和五十六年三月十五日

著者共に識す

本書のねらい

一、本書は、高校の一・二年生を中心に、古典における基礎的学力を短期間に修得させるを目的とした。

一、本書は、また、短期間において古典の総整理をしようとする諸君への配慮もした。

一、本書は、教材としては、大学入試における出題率の高いものから、多面的に、基本的なものから少し高度で応用力の広いものまでを選定した。

一、本書は、講述において、左の諸点に留意した。

読解の方法は、表現を中心に、多面的に、また作品形式に即応して具体的に示した。

〔口訳〕は、正確な逐語訳とし、文脈をとらえさせるために補訳を（　）内に示した。

必修個所や解釈の要所は、原文に①…③…の番号で示し、それに照応する口訳は番号と傍線とで示した。左のような同番号のものは、一セットで考えるべきものである。

……②たえて知るものなし。＝……②全く（これを）知っている者がいない。

〔語釈と文法〕は、重要なものを中心にして、文法は通説を基本に簡明を期した。

一、本書は、読解との深い関連から、〔文学史展望〕と〔助動詞要説〕とを用意し、さらに〔最重要古語三三〇〕を終りに添えた。また、〔助詞一覧〕は、見返しの四ページに収めた。

一、本書に用意した最重要古語は、知識の確認のためのものである。その効果的な使用法は、マスターしたものを消去していくことである。八〇パーセントを征服するならば、実力は身に付いたと言えよう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

◇はしがき
◇本書のねらい

1 古文読解法要説

1 主語と述語(一)—主語の省略と交代— …… 八
2 主語と述語(二)—述語の省略と慣用・余情の表現— …… 一〇
3 修飾語と被修飾語—連体修飾語と連用修飾語— …… 一一
4 係り結び—古文に特有の語法— …… 一三
5 敬　語—複雑のようで整然たるこの語法!— …… 一六
6 和歌と俳句—その考え方とその解き方— …… 一八
7 感動の表現—和歌・俳句を中心として— …… 二一
8 省略の表現—慣用的表現と余情の表現— …… 二三

2 作品研究

A 物語(小説)文学　＊その性格と読解法の急所
◆物語文学関係年表 …… 二七
〔一〕今は昔、竹取の翁〈竹取物語〉 …… 二八
〔二〕昔、男ありけり〈伊勢物語〉 …… 三〇
〔三〕須磨にはいとど心づくしの〈源氏物語〉 …… 三三
〔四〕姫君たちは、いと心細く〈源氏物語〉 …… 三四
〔五〕一年、入道殿の大井川の〈大鏡〉 …… 三六
〔六〕人目には何とも見えざりけれども〈平家物語〉 …… 三八

B 随筆文学　＊その性格と読解法の急所
◆随筆文学関係年表 …… 四一
〔七〕雪のいと高う降りたるを〈枕草子〉 …… 四二
〔八〕中納言参りたまひて〈枕草子〉 …… 四四
〔九〕大蔵卿ばかり耳疾き人はなし〈枕草子〉 …… 四六
〔一〇〕うつくしきもの〈枕草子〉 …… 四八
〔一一〕この草子、目に見え〈枕草子〉 …… 五〇
〔一二〕九月二十日の頃〈徒然草〉 …… 五二
〔一三〕悲田院の堯蓮上人は〈徒然草〉 …… 五四

C 日記文学　＊その性格と読解法の急所
◆日記文学関係年表 …… 五七

〔一四〕男もすなる日記といふものを〈土佐日記〉…五八
〔一五〕秋のけはひの立つままに〈紫式部日記〉……六〇
〔一六〕をばなる人の、田舎より〈更級日記〉……六三
〔一七〕その十三日の夜〈更級日記〉……六四

D 紀行文学 ＊その性格と読解法の急所

◆紀行文学関係年表 ……六七

〔一八〕二十一日。卯の時ばかりに〈土佐日記〉……六八
〔一九〕家に到りて門に入るに〈土佐日記〉……七〇
〔二〇〕月日は百代の過客にして〈奥の細道〉……七二
〔二一〕山形領に立石寺といふ山寺あり〈奥の細道〉…七四
〔二二〕そもそも、道の日記といふものは〈笈の小文〉七六

E 説話文学 ＊その性格と読解法の急所

◆説話文学関係年表 ……七九

〔二三〕昔、安部仲麿と言ひける人は〈土佐日記〉…八〇
〔二四〕今は昔、田舎の児の〈宇治拾遺物語〉……八二
〔二五〕横川の恵心僧都の妹〈十訓抄〉……八四
〔二六〕大斎院より、春つ方〈古本説話集〉……八六

F 評論文学 ＊その性格と読解法の急所

◆評論文学関係年表 ……八九

〔二七〕倭歌は、ひとつ心を種として〈古今集・仮名序〉九〇
〔二八〕彼の万葉集は、歌の源なり〈新古今集・仮名序〉九二
〔二九〕行く春を近江の人と惜しみけり〈去来抄〉…九四
〔三〇〕「松の事は松に習へ〈三冊子〉……九六
〔三一〕己、古典を説くに〈玉勝間〉……九八

G 詩歌文学 ＊その性格と読解法の急所

◆詩歌文学関係年表 ……一〇一

〔三二〕『万葉集』の歌Ⅰ〈皇族歌人の歌〉……一〇二
〔三三〕『万葉集』の歌Ⅱ〈人麻呂・赤人の歌〉……一〇四
〔三四〕『万葉集』の歌Ⅲ〈黒人・憶良・旅人の歌〉…一〇六
〔三五〕『万葉集』の歌Ⅳ〈家持・防人・東国人の歌〉…一〇八
〔三六〕『古今集』の歌Ⅰ〈題しらず・読人しらずの歌〉一一〇
〔三七〕『古今集』の歌Ⅱ〈六歌仙の歌〉……一一二
〔三八〕『古今集』の歌Ⅲ〈撰者たちの歌〉……一一四
〔三九〕『古今集』の歌Ⅳ〈代表歌人の歌〉……一一六
〔四〇〕『新古今集』の歌Ⅰ〈皇族・前期歌人の歌〉…一一八

〔四一〕『新古今集』の歌Ⅱ〈撰者たちの歌〉……一二〇
〔四二〕『新古今集』の歌Ⅲ〈代表歌人の歌〉……一二三
〔四三〕近世の俳句Ⅰ〈芭蕉〉……一二四
〔四四〕近世の俳句Ⅱ〈蕪村・一茶〉……一二六

3 文学史展望

1 上代の文学 ◆上代文学関係年表……一三〇
〔四五〕上代の文学《問題演習》……一三一
2 中古の文学 ◆中古文学関係年表……一三三
〔四六〕中古の文学《問題演習》……一三三
3 中世の文学 ◆中世文学関係年表……一三四
〔四七〕中世の文学《問題演習》……一三五
4 近世の文学 ◆近世文学関係年表……一三六
〔四八〕近世の文学《問題演習》……一三七

4 助動詞要説

最重要古語三三〇

1 助動詞要説……一四〇
2 最重要古語三三〇……一九四

古典ひとくちメモ

1 古典解釈のまとめ 二四
2 古今異義最重要語 四〇
3 多義最重要語 五六
4 動詞最重要語 六六
5 文学精神の展望 七八
6 枕詞要覧・季語要覧 八八
7 『万葉』・『古今』・『新古今』の比較 一〇〇
芭蕉・蕪村・一茶の俳風の比較 一〇〇
8 重要作家一覧 一三八
9 重要作品・事項一覧 一三八

◇問題対策の七原則……六
◇答案作成の五原則……六
◇日本文芸の展開……二六
◇助詞一覧……見返し

□ 問題対策の七原則

(1) 問題文に類似したものを、記憶の世界から呼びもどせ。〈類似解法探求法〉
(2) 問題文のジャンルを考えて、解法の決め手を選べ。〈性格看破考察法〉
(3) 全体を眺めて分析し、部分の検討に入れ。〈遠近観的考察法〉
(4) 確実に知っているものをとらえて、全体を見渡せ。〈飛び石式考察法〉
(5) 問題文を読み、設問を吟味し、再び問題文を考えよ。〈スイッチバック式考察法〉
(6) 設問の要求を正しくとらえ、問題文読解のヒントとせよ。〈打球選別式考察法〉
(7) 設問は、自信のあるものから考え、他は類推で答えよ。〈シングルヒット式考察法〉

□ 答案作成の五原則

(1) 未知の問題に、既修の総学力を結集して投入せよ。〈全力投球式解答法〉
(2) 設問の解答肢選択問題は、無縁のものを消去して行け。〈四球選別式解答法〉
(3) 設問の要求が記述式のものは、課題式小論文と思え。〈簡潔・明瞭な表現を！〉
(4) 正確な文字・かなづかい・句読点の用い方に馴れよ。〈正確な表記技術を！〉
(5) 見せる答案でなく、見ていただく見やすい答案を書け。〈理想的な答案を！〉

1 古文読解法要説

古文をどう読み解くか？ この方法についての要点を述べたのが、この「**古文読解法要説**」です。

世上に、「解釈法」「読解法」の名のもとにその方法を説くものがいくつかありまして、評判の良いものもありますが、この種の書物は、左のような観点から講述されるべきものと考えています。

(1) 読者諸君の学力の程度
(2) 読むべきものの程度と範囲
(3) 解法は根本的なものを中心とすること
(4) 解説は明快で応用力を高めるもの
(5) 最小の努力で最大の効果をあげるもの

本書は、古文の解釈について総合的なものを考慮しましたから、「読解法要説」については、きわめて基本的にして重要なものに範囲を限定しました。簡明ですから、かえって読者諸君の個性的な応用面が開かれると思います。

1 主語と述語（一）

――主語の省略と交代――

文章が作者の思想や感情の表現であることは言うまでもないことで、そしてこの文章というものは、多くの文――文法で説くところの――で成り立っています。ところで、文は、「ある事」について「ある説明が加えられる」という形で表現されます。それを、文法では、「主語と述語」というように説明します。

右のような事から、「主語と述語」というものが、文章――とりわけ古文では、理解しようとするときの手順の第一歩にされるわけであります。文章は、要するに、文の積み重ねで、その文の重なり方と、重ねられた文の流れの方向――文脈――とを解明することで、解釈――理解の道が開かれてきます。

主語の明示・確認と文と文とのかかわり

文は、原則として「主語と述語」の形をとりますが、主語と述語とが一回かぎりで表現される単文ばかりではありませんので、複雑な文や、文章として展開していくものについては、大局・高所から、大きく正確につかむことがたいせつです。

○白糸の滝は青葉のひまひまに落ち[a]て、仙人堂[B]、岸に臨み[b]て立つ[C]。水[c]みなぎつ[D]て、舟危し[d]。（奥の細道）

右で言えば、A・B・C・D＝主語、それぞれに対してa・b・c・d＝述語という関係であることは、説くまでもありません。しかし、少し詳しく見ますと、

Cの文は、独立を失って節（＝クローズ）となって、しかも、Dの文に対して原因を表します。

Aの文は、Bの文とは並べられただけで、因果関係はありません。したがって、書きかえて、

仙人堂、岸に臨みて立ち、白糸の滝は青葉のひまひまに落つ。

でもいいわけですが、「滝」の水が川に注ぎ、その川下に「仙人堂」が「岸に臨み」であるならば、原文の形が叙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

述の順序にかなっているわけです。こういう文と文との関係が、「文と文とのかかわり」であります。

主語の不在

文に主語の現れないものがあります。筆者自身が語る日記や紀行、また、自分自身の感動を表現する詩歌では、主語が現れないのが原則です。次には、主語は、いったん現れて、その勢力が持続されるならば、その主語は現れないのが通例です。読者に十分に理解されるからです。

○仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拝まざりければ、心憂く覚えて、ある時思ひ立ちて、ただ一人徒歩より詣でけり。（その法師）極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て帰りにけり。（徒然草）

さて、登場人物が多いときは、どうなるか？　ですが、右のような事情のほかに、敬語の発達によって主語の判断がつくときは、自然に主語が現れなくなります。例えば、「大蔵卿ばかり」（四六ページ）・「九月二十日の頃」（五二ページ）などの文章について調べれば、理解がいくはずであります。

主語の交代

文や文章において、主語で注意すべきことが、もう一つあります。それは、主語が気づかぬうちに他と入れ代わる――主語の交代ということです。主語は理解されるかぎり現れない、ということは、主語の交代は注意して読め、ということですが、多くは接続助詞「て」や「連用形、」で交代します。

○田一枚　植ゑて立ち去る　柳かな　（奥の細道）

右では、「植ゑて」は農夫または早乙女の行為、「立ち去る」は柳の下で田植を見ていた芭蕉の行為です。

○昔、男ありけり。その男、身を要なきものに思ひなして、「（我＜＝実質的には「男」は）京にはあらじ。（我は）東の方に住むべき国求めに＜行かむ＞」とて、行きけり。（その男）もとより友とする人一人二人して、行きけり。道知れる人もなくて、（その男たち）まどひ行きけり。（伊勢物語）

右の文章は、叙述のあとを着実に読めば、文章の終わりの「まどひ行きけり」の主語は、「男ありけり」の「男」を受けながら「男たち」と考えるべきです。主語の交代とは、こういうもので、正確に訳出すべきものです。

2 主語と述語（二）

――述語の省略と慣用・余情の表現――

主語に対する述語、――これは無くてはならないはずですが、日本語というのは、述語が最後に来て論理的に文が完結するものですから、肯定になるか否定になるか、最後まで待たなくてはなりません。

しかし、明確に述語の言い方が予想できたり、同じような言い方で慣用的表現が定着すれば、述語は不用！　となります。が、ここで、日本語の非論理性が言われることになります。がそういう性格だと割りきれば、これこそ普通の言い方であり、逆に言えば、省略によって余情が生まれる源泉でもあるわけです。言いかえると、述語の省略に出会ったら、いつも、慣用の語法か？　余情の表現か？　―というように考えるのが急所で、前者では係り結びの結びに、後者では詩歌の表現によく現れます。

述語の不用！

「省略されたものは、補え！」―これは、省略表現における解釈の鉄則です。省略表現で名高いものには、次のようなものがあります。

述語の省略は補訳せよ！

○春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、むらさきだちたる雲の、細くたなびきたる。（枕草子）

右にあっては、「春はあけぼの、いとをかし。」と補うのが古来の考え方ですが、現代語で「君はお昼は何にする？」（「お昼」も「お昼の食事」の省略ですよ！）に対して、「おれはソバだ！」の言い方があるので、「春はあけぼのだ。」が正解だという学者もありますが、「彼は学生だ。」の言い方とは別の性質のものですから、「春はあけぼの、いとをかし。」とすべきです。これなどが、省略による余情の表現です。

そのほかでは、係り結びのお話のとき説明しますが、係りだけで下を省略する―多くは述語にかかわるもの―のは、慣用的表現にかかわるとともに、余情の表現などをねらったと考えて、さして誤りではありません。

3 修飾語と被修飾語 ——連体修飾語と連用修飾語——

文が主語と述語とだけで成り立つなら簡単ですが、それでは人間の思想や感情の表現は十分にはできません。そこで修飾語が出てくるわけですが、「修飾」の意味がわかりにくく、これを「限定する」「詳しく言い定める」とも説明しますが、やはりわかりにくいようです。「修飾」とは、「(内容のあるように)修め飾ること」でよさそうです。

連体修飾語と連用修飾語

ところで、修飾語は、上に示した二種類で、修飾される語は修飾する語の下にあって、被修飾語と呼ばれます。さて、ここでたいせつなのは、どれが修飾語で、どれを修飾するのかということです。そして、連体修飾語は主語の方に連用修飾語は述語の方にというのが、大体の傾向です。そして、この二種類のものの内容を大きくとらえますと、左のようになります。

連体修飾語
- A—形容詞・形容動詞の連体形
- B—動詞・動詞連語(助動詞をふくむもの)の連体形
- C—「体言+格助詞の・が・つ」
- D—枕詞の大部分、序詞のうちのある種のもの

連用修飾語
- A—副詞
- B—形容詞・形容動詞の連用形
- C—「活用語+接続助詞」
- D—「……+係助詞または副助詞」
- E—枕詞や序詞のうちのある種のもの

表にすれば、ほぼ右のようになりますが、実際には多くの作品にあたって、その扱い方を心得ておくことがたいせつです。特に急所は、連体修飾語は被修飾語の直ぐ上にありますが、連用修飾語は、強調のために、被修飾語よりずっと上に置くことが通例です。述語や連用修飾語の中にある連体修飾語を強めたいときには、被修飾語と一続きにして、倒置法を用いて上の方に置きかえるという手を使うこともあります。

4 係り結び ——古文に特有の語法——

係り結び

古典の文章の表現には、この「係り結び」というのがあります。これによって、和歌でも、文章でも、ぐっとひきしまってきます。口語の文章には、これはありませんので、難物！ ということにもなりますが、これに習熟すれば、古文読解への近道の一つ、ということにもなります。『徒然草』では、一つ一つ文を拾い上げて、係り結びの面から見ますと、全体の三分の一は、何らかの係り結びをとって文を終止しています。この事実は、係り結びに熟達すれば、『徒然草』は、読解の面では征服しやすいことになるわけです。

さて、この係り結びは、ある語や語句を強調したり取り出したりして、文の終止には関係し影響する、というものですから、これを文の表現の上から言えば、部分を全体という関係に置きかえて考えることです。

A山なん高き。
B山高くなんある。

Aは、「山」を「なん」で強示した表現で、Bは、「高く」を「なん」で強示した表現です。説明を改めますと、Aは、「高い」のは「山なんだ！」であり、Bは、「山」が、「えらく高いんだ！」となる、というわけです。

今度は、疑問の表現における係り結びを考えてみますと、

A春や疾き。

Aは、口訳では、「春（の季節）が、疾く（＝例年なら春にならないころに）来たのか？」というようにしますが、この口訳では少し不正確です。正確に言えば、「疾いのは、春か？」の意で、さらに補えば、「はやくやって来たのは、春の方なのか？」となります。それは、この言い方に並べられた「花や遅き。」と考え合わせますと、はっきりします。

ですから、「春」について、「はやくやって来たのか？ （それとも）おそくやって来たのか？」という言い方を考

えるならば、次のような言い方になります。

B春、疾くやある。

Bの口訳は、「春が、はやくやって来たのか？」となり、「春の訪れが、はやいのか？（それとも、おそいのか？）」の心持ちを表すわけです。

つまり、疑問や反語の意の助詞を用いている疑問文や反語文にあっては、その疑問の助詞の直ぐ上に位置する語に、疑問や反語の焦点が当てられている、――ここが急所です。

《や・か》　この疑問や反語を表す係助詞の「や」「か」の用法はどうちがうか？　ということですが、これは、「か」はいつも疑問語と併用されるということです。公式化すれば、左のようになります。

や――……や……連体形（＝結び）。　か――……疑問語……か……連体形（＝結び）。

係り　係り結びの「係り」とは、上に位置している「語」が、下方の表現にある内容を与え、その表現の仕方を、ある形にコントロールすることです。「花　美し」の場合は、主語と述語との関係で、このようなのは、「係りと結び」とは呼びません。「花、いと美し。」となりますと、『いと』は『美し』に係る」と言うこともありますが、これは上方から修飾するの意で、係り結びの法則における係りではありません。

結び　とは、広い意味では、〝文〟を終止することに言います。「風吹く。」・「風清し。」の、「吹く」・「清し」の類です。しかし、「係り結び」のときの「結び」は、右の意味の上に立っていますが、文を終止する文節の最後に位置する、活用する一単語について言います。例文を示しますと、

A風ぞ（係り）吹く。　B風こそ吹け。
C風ぞ吹きぬる。　D風こそ吹きしか。
E風ぞ吹きにける。　〈注〉――……係り、。……結び。

上の五つの短文では、。印の部分が結びです。動詞で終止すれば動詞が結び（A・B）、動詞の下に助動詞が来て終止すれば助動詞が結び（C―「ぬ」の連体形、D―「き」の已然形）、Eは、「ぬ」が「に」となり、「ける」が「けり」の連体形で、結びとなります。

《ぞ》　係助詞の「ぞ」は、和歌にも文章にも用いられ、結びは連体形となります。これは代名詞の「そ」と同一表現の語で、「その……」というように、その直ぐ上の語を指示・強調するものです。『万葉集』では、「…そ

…」と、清音で用いられているものがあります。

さて、「ぞ」の訳し方としては、古くは「実に……」と強調の副詞を用いたものですが、私は、すべてそれで通すのは不正確だと（むしろ多くは誤りだと）考えています。その理由は、この「ぞ」は、多くは体言または体言相当句の上に置くものですから、「その……」と指示代名詞的に（口語文法では連体詞ですが）訳し、形容詞や形容動詞または副詞のときに「まことに…」「ほんとに…」「実に…」と訳すのがよかろうと思います。

○霞立つ春の山べは遠けれど
　吹きくる風は花の香ぞする
　（古今・春下）

○夕涼みよくぞ男に生まれける
　（松濤）

口訳（春のものである）霞の立つ春の山のほとりは（里から）遠いけれども、（その山べから）吹いてくる風は、その（山べの山桜の）花の香がするよ。

〈注〉「…するよ。」と「よ」を添えたのは、歌の感動の意を表したもの。

口訳（暑い夏の）夕涼みに（スネや足もむき出しにできるので、私たちは）さいわいにもまア男に生まれたよ。

〈注〉右は直訳で、正確に言うなら、「よく」は結果を表すのであるから、「男に生まれて、実によかったよ」と訳すべきです。

《なむ》

右の「ぞ」に対して、口語的で、和歌には全く用いられず、文章でも会話に主にして用いられるのが「なむ」です。平安時代の中ごろから「ナン」と発音し、「なん」とも書きました。『徒然草』では、すべて「なん」と書かれているようです。

『徒然草』では、会話に二例（ここは高校生には少し難解のところ）、地の文に一例で、これは係り結びとなるもの、他の七例は「…となん。」「…てなん。」「…になん。」「…をなん。」という省略の表現のものです。

○「これなむ都鳥。」と言ふを
　聞きて、……（伊勢物語・九）

口訳「そのこれが都鳥（だよ）。」と（渡し守が私たちに）言うのを聞いて、……

〈注〉「　」内が会話のことばであることは自明と思います。これは、「昔男」（むかしをとこ）が東下りをして出会った関東の男のぶっきらぼうなことばです。

美男で知られた在原業平らしい男は、この渡し守のことばには、さぞや驚いたことでしょう。

『徒然草』では、地の文に、左のように用いています。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com